乙川集落
エンジン

　大阪府の北に「茨木」（いばらき）という市がある。府民でもたまに間違えるのだが、東北の「茨城」（いばらぎ）とは何の関連性もない。山の連なる地域に位置してはいるが、中央は大変賑わっていて、茨木市駅はショッピングセンターや飲食店が立ち並ぶ、府内の主要な駅の一つである。

　そこから阪急バスへ北の方に向かう。進んでいくにつれ、ビルや大型商店が徐々に姿を消し、墓地や工場、それに加えて表面を削り取られた山肌が姿を現す。

　そこからさらに進むと、トンネルを経て緑覆い茂る山の中に設けられた道へと出る。大阪というと都市のイメージが強いかもしれないが、こういう場所もたくさんあるのだ。

　それほど高くない素朴な山々と岩の間をゆるやかに流れる安威川に上下から挟まれる形で、車作集落がある。ざっと歩いた感じでは三十件程の民家が立ち並び、そこには明治か大正に建てられたと思われるものから、つい十何年前の新築までが混在していて、それに加えて段々畑や、錆びですっかり赤くなった金属製の水車などもある、ユニークな場所であった。

　更に徒歩で北へ進むと、いくつかの別れ道へを見つけることができる。道の途中にはニホンザルの親子連れやモモンガなどもいて「ああ、すっかり田舎なんだな」と実感させられるのであるが、自前の糸で大木から下がっている芋虫の類がしばしば服に付着するので、それらが嫌いな方は近づかぬ方が賢明である。

　別れ道というのは三つで、一つは車作大橋を渡ってすぐ隣の高槻市へと出る車道。この周辺にはキャンプ場もあり、近くの川でよくアユ釣りをしている。その道を渡らず坂を道なりにあがっていくように進むと、二つの分岐がある。

一つは森林の中へと続く道で、一見おっかなそうな暗い路であるが、以外と短く、これを道なりにまっすぐ進むと清坂集落という、車道沿いの田んぼばかりの場所にでる。

そしてもう一方、更に山を上がるようにして進む道の先に、乙川集落は存在する。名前の由来は不明ではあるが、分岐点に設けられた粗末な看板には「右　清坂集落　左　乙川集落」とかかれている。

だが、地図にも載っていないし、ネットでも情報が出てこない。その乙川集落へと行く道の途中には「工事中」の看板と虎色のロープが掛けられていて、立ち入りが禁止されている。看板の劣化具合から見るとかなり長い間こうなっているようではあるが、具体的に何の工事が行われ、いつまでそれが続くのかは、どこにも書かれてはいない。

大抵の人間はここで引き返すだろうが、私は違う。とにかく廃墟や廃村といったものが好きな男で、道なき山中を何時間もかけて歩く事を苦としない、自分で言うのもなんだが少々奇特な人間である。そんな私がこの乙川集落に、興味を持たないはずがなかった。看板の通行止めなど何のその、あっさりとロープを一跨ぎし、奥へと進んだ。

その道に入ってからしばらくは、人が歩きやすいように整えられた、やや緩い坂の細道が続くのであるが、大体３０分程歩いてカーブに入ったところで、雰囲気が少しずつ変わり始めた。道の角度がどんどん急になって下り坂となり、それに連れて雑木林が周囲を囲み始める。道幅も少しずつ細くなり、尖った小石や窪みがそこらにあるので、登山靴を履いてきてよかったと実感させられた。

　そうして林道を更に進んでいくと、一件の納屋のようなものが建っていた。江戸時代の倉を思わせる白壁の建物で、屋根はぽつぽつと瓦が欠けているのにその壁は新築同然に真っ白なのが、妙にアンバランスだった。

　そしてそこに、人がいた。４０か５０ぐらいの男なのだが、背中が膨れ上がり、腰が海老のように折れ曲がったいわゆる「せむし」であって、落ちくぼんだ目でじっとこちらを睨みつけてくる。

　こちらが近づくと、その筋肉はついているが疱瘡だらけの手を振って、「アア、アア！」と憎々しげに叫んできた。どうも「出て行け」と言ってる風だった。

　だから一旦引き返さざるを得なかったのだが、そんなことで諦めるような人間ではない。日を改め時間を変え、何度か足を運ぶ内に、運良くそのせむしがいない機会に巡り合うことができた。

　帰りに遭遇した場合どうやり過ごすか考えながら荒い道を進んでいくと、途中で道が消えてしまっていた。もう少し具体的に言えば、それまで曲がりなりにも人が歩く為に存在していた平たい地面が無くなり、それ以降は斜め３０度はありそうな傾斜を、身体を反らせながら落ちないようにして歩かなければならなかった。

　一応、木々に麻縄が結びつけられていて、これにしがみついて重力に逆らって少しずつ進んでいくことになるのだが、これがまた年代物で、土と雨ですっかり湿気ている上に、所々虫が這っている。かく言う私もうっかり一匹芋虫を握りつぶしてしまい、後の処理が大変だった。それに加えて木々の密度がいよいよ濃くなり、わずかに差し込む日の光を頼りに進まなければならないほど、周囲が暗い。

　そうした道を約１時間かけて進むと、やがて入ってきた時とは逆に、斜面が徐々にゆるやかな平地となっていき、再び難なく歩行ができるようになった。

　かなり古いものだろうか、すっかり朽ち果てた木の看板が斜めに建てられていて、かろうじて「コノサキ　乙川」と読めた。辺りは竹林から名も知らぬごつごつした表皮の樹木の群生地へと変化し、いよいよただならぬ異境へ来たという事実を強く実感させられた。

　そのまま、湿気が含まれたゆるい地面をちゃくちゃくと歩き、ようやく件の乙川集落らしき場所へと着いた。そこは想像していたよりも奇っ怪で、常識を外れた場所だった。

　村の前には大人の男性ほどの大きさの鳥居がある。かなり古い時代のものだからか、その木材は完全に朽ち木と化していて、赤く塗られていた跡が欠片のように付着している他には、あちらこちらに食べられそうにないきのこが生えていた。

　そして肝心の集落は、その鳥居をくぐった先に存在している。つまり、何故かは分からないが、この鳥居が集落の入り口となっているわけだ。

　集落の内部は中心に位置する樹齢数百年はありそうな神木が生えていて、今にも千切れそうな注連縄が下部にぶら下がっていた。そしてそれらを囲むように、何件かの古い家が建っていた。

　まず一件目は入り口から一番近い場所にある二階建ての家で、がたついた木の引き戸の側に真っ黒になった表札のようなものが掛けられていて、かろうじて一番下の「島」という字は読めたが、その上の文字は潰れていて全く読めなかった。

　中は酷いアンモニア臭がして、鼻を押さえずにはいられなかった。

　玄関のすぐ側にあった居間と思われる場所には古風なちゃぶ台があり、その上に何かが置かれていた。腐った畳を踏み抜かないようそれに近づいて確かめてみると、意外なことにそれは二十年ほど前に流行った携帯ゲーム機だった。

土と黄ばみで真茶色になっていておそらくはもう動かないだろうが、このような数十年も人が立ち入っていないような場所にあるのは少々意外で、不意に子供の頃の記憶を思いだし、感動すらしてしまった。

その隣は食堂と台所と思しき部屋だったが、木製の床が完全に痛みきって色が悪く、所々抜けて穴が空いているので入ることはできなかったが、家の中に漂うアンモニア臭はそこの流しから来ていたのは間違いなかった。

二階へ続く階段は足下にこそ石ころや茶碗の破片が散らばっていたものの、大した腐食もなく、難なく上がることができた。

二階には二つ部屋があった。一方の部屋には大きなバッファローの角が壁に掛けられたままになっていて、机には高級そうではあるがペン先の錆びた万年筆が散らばっていて、おそらくは家主の部屋なのだろう。

　特に気になるようなものといえば、部屋の隅っこの方に折れた万年筆が何本も転がっていたことぐらいだった。

　だがもう一つの部屋、これがまた妙だった。

　六畳ぐらいの和室で、奥に押し入れがあったのだが、その敷居の所に鉄格子が設けられていた。しかもしそれはかなり隙間なく作られていて、手すら通すことができない。鉄格子は錆びてこそいるが、かなりしっかりと固定されていて、引っ張ってもびくともしない。一体何が入っていたのだろうかと思ったが、そもそも中へ入る出入り口のようなものも見あたらない。

　後ろ髪を引かれつつも、これ以上にめぼしい物は見つけられなかったので、この家から出ることにした。

二件目の家は一階建てではあったが、先ほどの家と比べて横幅は大分大きかった。縁側のようなものも確認できたが、ガラス戸の直ぐ側にタンスが並べられているのか、中の様子を覗くことはできなかった。

表札を見てみると所々虫喰穴はあったものの、「猿島」と読むことができた。先ほどの家の表札の二文字目が「島」だったことを考えると、おそらく同じ名字なのかもしれない。このような中心部から離れた小さな集落では、同じ名の家が何件もあるというのはよくある。

後ろ向きに倒れた玄関戸のガラスの破片を登山靴で慎重に踏み締めながら、長い廊下を進んでいく。

突き当たりの部屋にはいくつもの箪笥や小物棚が倒れ散らかっていて足の踏み場がなく、二つの洋服箪笥が先ほどの縁側のガラス戸を塞ぐように位置していた。他はトイレや風呂場で、独特な刺激臭以外は特に何もない。

　問題は、台所のような場所にあった。天井にはシャンデリアがかけられていて、テーブルには黄色くなった英字新聞のようなものが積まれていた。

　そして、なにやら香ばしい匂いがするのでコンロの方を調べてみると、鍋に入ったスープのようなものがあった。中で羽虫が何匹も死んでいてとても食えたようなものではなかったが、色合いから見るにクラムチャウダーのようで、しかも鍋の外側を触るとほんのりと暖かかった。

　まさか、誰かいるということだろうか。こうした廃墟に人がいるという可能性は、充分にあり得る。ただの浮浪者であればそこまで問題ではないが、逃走中の犯罪者や、過激派という可能性もゼロではない。

　だが、ついさっき他の部屋を探していた時は痕跡を見つけることはできなかった。本当にここに「住人」がいるのであれば、もっと他にそういったものがあってもよいのではなかろうか。

とりあえず、一旦立ち止まり、耳を済まして見る。小鳥の鳴き声以外、何も聞こえない。

とは言え、明確な痕跡があるのだ、ここはすぐに出て行った方がよいだろう。

私は背後に意識を集中させ、出来る限り急いでその場を離れた。家を出た途端、茂みが揺れるような音がして、私は反射的に振り向いたが、誰もいない。あの台所の出来事が引っかかっているのか、首の周りに何やらチリチリしたものがまとわりついているような、妙な感覚がする。

念のため、周囲を見渡すが、何もない。

だが、訪れた時とは打って変わり、この場所が不快に思えてきた。

突然、何かが素早く目の前を通り過ぎ、思わず身構えた。

周りを確認すると、側の木に大きなカミキリムシが止まっていた。都会では滅多に見られない珍しい虫だ。通常のカミキリムシは手のひらに収まるほどの大きさしかなかったと思うが、これはその倍近くある。下手に指を噛まれでもしたら、そのまま持って行かれるのではないだろうか。

カミキリムシはその場を離れ、高く飛び上がった。自然と、それを目で追う。

すると、見てしまった。

木の上に、人がいた。中央にある神木のてっぺんの茂みから、まるで小鳥の雛のように、たくさんの人間が顔を出して、こちらをじっと睨んでいた。

老人から成人の男、少女までもが目玉をギョロギョロさせているその異様な光景に直面し、私は全く動けなかった。

その時、強く肩を叩かれた。

全身が飛び上がる思いで振り向くと、例の倉のせむしがいた。相変わらず不愛想にアアアアと口にしながら、私が来た道を指さす。帰れ、と言っているようだった、それ以外に選択肢はなかった。

私が恐怖で固まった足をぎこちなく動かして帰り道を歩いている間、男は頭上を警戒するように見回していた。

ようやく倉までたどり着くと、日はほとんど沈んでいて、辺りはもう薄暗くなり始めていた。

男はしばらく私をじっと睨んでいたが、やがて服の中から鍵を取り出すと、それで倉の戸を開き、中へと入っていった。

私はぎりぎりその日最後のバスに間に合い、何とか都会へと帰り着くことができた。

あの集落で見たもの、体験したことについては、ほとんどが正体不明である。その後図書館などで市史を開いて調べてみたりしたが、有用な情報は一切得られなかった。

ただ一つ、大正時代中頃のの北大阪の地図を見ていると、ちょうど車作の辺りに小さく「追詰川」と書かれていた。追詰川というのはどことなく「乙川」に似ているし、場所もほぼ同じだ。

だがしかし、その後の時代の地図にはそのような名の場所は一切書かれていない、結局それっきり何も分からずじまいだ。

あのせむしは何のためにあそこにいるのか、神社の中に構成されているあの廃集落はいつ頃からそこにあったのか、そして最後に見た木の上の人間は、果たして集落の住人であったのか。

いずれにせよ、この事件をきっかけに、私は廃墟廃村めぐりの類を一切止めた。

（完）